

聖書：ヤコブ 4：6～10

説教題：神に近づきなさい

日時：2017年11月5日（朝拝）

前回ヤコブは4節で、手紙の読者たちに「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。」と語りました。「貞操のない人たち」とは、直訳すれば「姦淫の女たちよ」という表現でした。これは旧約聖書で神とイスラエルの関係が結婚関係にたとえられて来たことを背景とする言葉です。この手紙の読者たちは神を信じると言いながら、世を愛する生活をしていました。2章で見たように、彼らは富んでいる人たちを貧しい人たちよりも重んじてえこひいきをしていました。また3章前半で見たように彼らは舌を制御せず、怒りの言葉、ののしりの言葉を口から出していました。また3章14節で見たように苦いねたみと敵対心をもって誇っていました。また4章1～2節に記されていたように戦ったり争ったりしていました。彼ら自身、迫害によって散らされて、新しい土地で大変な状況にありましたが、そんな中で生き残りをかけてお互いの地位や評価を巡って、互いにねたみ、争い、戦い合うようなことをしていました。それは神から心が離れて世を愛している姿だとヤコブは言いました。またヤコブは5節で「神のねたみ」について述べました。神は私たちがねたむほどに愛しておられると。私たちはここに神がどれほどの思いをもって私たちを見つめてくださっているのか改めて知り、驚きをもって感謝します。しかし同時にそこまで愛されている者として、もしその愛に答えられないなら、自分にとって大変なことを意味することも知ります。ねたむ神は私たちが神に心を向けられない生活が続けるなら、厳しく報復されるはず。この神を思って震え上がってこそ本当です。

では私たちはどうしたら良いのでしょうか。神の愛に十分に答えて来なかった自分を思うなら、もはや救いはないのでしょうか。そんな私たちにヤコブは進むべき道を示します。6節：「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。『神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。』」自分は今のままでいいと神の前で高ぶっている者は神から退けられ、やがて相当の報いを受けるが、自分の罪を認めてへりくだる者、神にあわれみを請う者に神は恵みを垂れてくださる。ここに私たちの救いがあります。罪深い自分、どうしようもない自分を認め

て神にあわれみと導きを請い求めなら、神はそのような者を見捨てないと言われます。その者に恵みを授けてくださる、その罪を赦し、きよめ、本来の正しい状態、祝福の状態に回復させてくださる。ではそのへりくだるとは具体的にどうすることなのか。そのことが続く7節以降に記されています。それはただ単に自分の罪を認め、身を低くすることではありません。それは自分の残念な姿を認めて、悔い改めの生活へ進むことです。これまでの生活から離れて、神が命じている道に進むことです。以下、三つのポイントで見て行きたいと思います。

まず一つ目にヤコブが言っているのは、「ですから、神に従いなさい」(7節)ということです。自分の過ちを認め、へりくだって神に恵みを求める人は、生き方を変える人でなければなりません。それは一言で言えば、「神に従う」生活です。実にこの手紙の読者たちは、これをして来ませんでした。神に従うより、この世の価値観にならって行動していました。それを悔い改めて、神の御言葉に聞き、神に従うことを第一に選び取る生活をするということです。これはイコール「悪魔に立ち向かう」ことでもあります。彼らの欲望に従った生き方の背後には悪魔の存在があることをヤコブは語って来ました。3章6節の「ゲヘナの火によって」という言葉は、サタンとの関係を示す表現であることを以前に見ました。また3章8節の「死の毒に満ちている」という表現もそうでした。3章15節にも、ねたみや敵対心をもって誇るような知恵は神から来たものではなく、悪霊に属するものだとされました。ですから「悪魔に立ち向かう」とは、舌を制御せずに話したくなる時、あるいはねたみや敵対心によって高ぶりたくなる時、サタンがすぐそばにいることを思って、その働きに抵抗するということです。サタンのそそのかしに乗らず、その言いなりにならないということです。本当の敵を見据えて、その敵に立ち向かう。すると、どんなことが起こるでしょうか。ヤコブは「そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります」と言います。これは大事なことです。もし私たちが悪魔に立ち向かわず、むしろ悪魔の働きに心を許すなら、悪魔は益々私の上に臨み、強い力を持つようになる。参考になるのはイエス様を裏切ったユダです。彼は悪魔に立ち向かうチャンスが幾度もあったのに、それをしなかったため、ついに悪魔は彼の上に力を持ち、彼を全く支配するようになりました。ユダはそこから逃れられなくなりました。しかしもしその反対に悪魔に立ち向かうなら、悪魔は私たちから逃げ去って行く。ですからいかに一回一回の取り組みが大事でしょうか。もしある時、悪魔に心を許して、悪魔の思

うように行動すれば、次はもっとひどい力の下に置かれるのです。自分をそういう状態に追い込んでしまうのです。しかしもし今、それを断ち切ることができれば、私たちは将来、さらに悪魔を遠ざける勝利の道を進むことができる。この幸いに進むようにと勧められているのです。

2つ目のポイントは「神に近づきなさい」(8節)。7節の「神に従いなさい」とほぼ同じ勧めとも言えますが、新しいニュアンスが加えられています。この「近づきなさい」という勧めは、この手紙の読者たちがある意味で神から離れた状態にあったことを暗示していないでしょうか。「神」と「世」の中間に自分を置き、どっちつかずの状態にあった。一応神から遠く離れてはいないという場所に自分を置きつつも、世からの誘惑があれば、喜んでそちらに引きずり込まれて行くような位置に自分を置いていた。そんな彼らにヤコブは「神に近づきなさい」と言います。神とのより親しい交わりを求めて前進しなさい、と。御言葉に聞き、神に祈り、神に従う生活に進むこと。その人に素晴らしい約束が与えられています。「そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます」ということです。ある人はこれを見て、人間が近づくのが先なのだろうかと問うかもしれません。キリスト教では恵みが先立つのではないか。しかしこれは救いについての言葉ではありません。ここで述べられていることはクリスチャンが悔い改める時の祝福です。私たちが悔い改め、神に近づくと、神も近づいてくださる。あの放蕩息子のたとえを思い起こしても良いかもしれませんが。弟息子が悔い改めて戻って来た時、父はどうしたのでしょうか。あんなひどいことをした奴は、もう家に入れないとはいいませんでした。むしろ自ら駆け寄り、その胸に抱いてくれました。それと同じように、神は私たちの悔い改めを心から喜んで受け入れてくださるのです。私たちが神に近づく時、神も私に近づいてくださるといふ何にも代えがたい豊かな臨在を私たちは経験するのです。

8節後半は神に近づくことをもう少し具体的に言い換えたものです。ヤコブはここで読者たちに向かって「罪ある人たち」とか「二心の人たち」と言います。4節の「貞操のない人たち」と同じく、厳しい言葉です。しこれはこうした言葉をもって、彼らの眠りこけた心を叩き起こそうとするためのものでしょう。そしてここに「手を洗いきよめること」、また「心をきよくすること」が命じられています。詩篇24篇4節に「手がきよく、心が清らかな者」という表現がありますように、「手」とは外側の行いのこと、

「心」とは内側の状態を指します。つまり神に近づくとは、私たちの手足の具体的な使い方に現れるものです。自分のからだを、五体を神に喜ばれることのためにだけ使い、ささげることです。そして単に外側の行動がそうであれば良いのではなく、その心の思い、動機、考えることにおいても、神の前に後ろめたいものがないように、ただ神に向かうものであるように、そうして神に近づくように！とされています。

最後3つ目のポイントが9～10節です。9節はビックリするような勧めです。「あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。」これはどういうことだろうかと思います。しかし今日の箇所はすべて悔い改めの勧めです。私たちはつい外側の状況を見て、私は苦しいとか、悲しいとか、泣きたいと考えますが、ヤコブが言っているのは自分の内側を見つめるがゆえのことです。悔い改めるとは、自分の状態を見て悲しむことです。これは旧約聖書ヨエル書2章の次の言葉を思い起こさせるものです(12節)。「しかし、今、——主の御告げ——心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」9節後半の「あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい」という言葉も、一瞬戸惑うような言葉ですが、イエス様もルカの福音書の「平地の説教」でこう言っておられました。「いま笑うあなたがたはあわれです。やがて悲しみ泣くようになるから。」すなわち非難されているのは、この世の表面的な笑いのことです。自分のあわれな状態を省みることもなく、ただ今、経済的に富んでいるから、人々から人気や評価を得ているから、その生活が祝されているからと言って、大声で笑い、私は満たされている、恵まれている、今の私に神など何の意味があろうかと言っている人々のことです。その人々はやがて神のさばきに直面して泣くようになる。だから世の繁栄に心奪われ、浅はかに笑う生活ではなく、今の内に泣け！とされています。悲しむべきことを良く見て悲しめ。自分が神の前でどういう状態にあるかを本当に良く知って嘆け！とされています。

そのように主の御前でへりくだる者を、主は高くしてくださいと10節に言われています。6節と同じです。悔い改めて神に近づく者を神は軽んじません。心砕かれて神を求める者を、神は恵みによって高く上げてくださる。この手紙の読者たちは、ともするとこの世の価値観にならって、自分で自分を高く上げようとしていました。そのために争い、戦っていました。しかしそのように高ぶる者はやがて御前から退けられる。それ

とは反対にへりくだり、自分の罪を悲しみ、神のあわれみにすがって前進する人。そのような人に神は恵みを与え、必ず高く上げてくださると言われています。

果たして私たちは祝福をどこに求めているでしょう。神が何かをくれると言えば神にも求めるが、この世がもっと何かを約束してくれるなら、神を後ろに捨てても世の方に走って行くという姿が私の生活に見られることはないでしょうか。どっちつかずの状態に祝福があるわけではありません。姦淫の生活にはやがて終りが来ます。その報いが来ます。刈り取りの日が来ます。今の自分を振り返って、もし神との関係が正しい状態にないことを思うなら、二心の状態にあるなら、靈的姦淫の状態にあるなら、そのことを悔い改め、へりくだり、神に新しく近づく生活へ進みたいと思います。また悪魔に立ち向かう生活へ進みたい。そこに素晴らしい約束が与えられています。すなわち悪魔はあなたから逃げ去るということです。そして代わりに神が近づいてくださいます。私が近づいたのに、神が離れて行くことはありません。私が近づくなら、神も喜んで近づいてくださいます。そしてご自身の豊かな臨在が私の生活に常にともにあるという素晴らしい祝福を回復してください。この約束に励まされて、私たちは自らの状態をもう一度検討し、へりくだって神に近づく歩みをしたいと思います。神の御言葉に聞き入る時間を取り、祈りを通して神とお話しする時を大切な時として持ち、そこで教えられる御心の道に喜びをもって進んで行く。そうする者に約束されている祝福を受け取って、主がこのような者を恵みによって高くしてくださるといふ、私たちが自分の力で勝ち取るどんな祝福よりもはるかに勝る祝福に生かされ、主を喜び、主の栄光を現す歩みへ向かってまいりたいと思います。